

# 夕雲

小川未明

青空文庫



お庭にわの垣根かきねのところには、コスモスの花はなが、白しろ、うす紅べにいろ色と、いろいろに美うつくしく咲さいていました。赤あかとんぼが、止とまつたり、飛とびたつたりしています。お母かあさんは、たんすのひきだしにしまつてあつた、浅黄木綿あさぎもめんの大きおおなふろしきを出だして、さおにかけ、秋あきの日ひに干ほしていられました。ふろしきをひろげると、白しろく染そめぬいた紋もんが見みえました。「お母かあさん、大きおおなふろしきですね。」と、もも子こさんは、お縁えんがわ側わで見みていて、いいました。

「もう三十年ねんも前まえになります。私わたしがお嫁よめにきたときに、おふとんを包つつんできたのですよ。昔むかしの木綿もめんですから、まじりがなくてじょうぶです。こんど、おまえがお嫁よめにいくときは、これにおふとんを包つつんであげますよ。」と、お母かあさんは、おつしやいました。もも子こさんは、なんだかうれしいような、悲かなしいような気持きもちちがして、ぼんやりと日ひがほこほこと当あたる、布ぬのをながめていました。

よし子こさんや、かず子こさんのお母かあさんは、まだお若わかくて、髪かみの色いろも黒くろくていらつしやるのに、うちのお母かあさんは、どうして、もうこんなに白髪しろがが多いおおのだろう。かず子こさんのお母かあさんも、染そめていらつしやるときいたけれど。

「お母さん、髪をお染めにならないの。私、お母さんの若くおなりなさるの、うれしいんですもの。」

「ええ、染めたいと思いますが、いつもそんなときには、お客さまがあつて、汚い頭をしていて困りますから、もも子のお休みの日でもないと染められません。」と、お母さんは、いわれました。

もも子さんは、明日は日曜日だから、お母さんが髪をお染めになればいい、そして、ごいっしょに散歩につれていつていただこうと思ひました。

「明日、私、どこへもいかずに、お家にいるわ。」

「じゃ、明日ばかりは、染めましようね。」

日曜の日には、もも子さんが、きた人のお取り次ぎをしました。そして、午後のことであります。

「おかげで、さつぱりしました。もも子などは、これから大きくなって、世の中というものを知るのですけれど、お母さんのように年をとると、髪は白くなるし、肩は凝るし、目はかすんで、しかたがありません。きようは、よく家に来てくれました。さあ外へいって遊んでいらつしやい。」

「お母さん、こんど按摩さんに、もんでもらうといいわ。」

「きましたら、もんでもらいましたよ。」

もも子さんは、外へ出て、お友だちと、お宮の鳥居のところまで遊んでいました。そばには大きないちようの樹があつて、このごろ吹く風に、黄色な葉が、さらさらと散つて、足もとは一面に敷いたようになっていました。

「こんどの日曜に、もも子さんくりを拾いにいかない。」

「どこかに、くりの木があつて。」

「すこし遠いけど、人の住んでいない荒れた屋敷で、大きなくりの木があるの。学校の帰りに、松野さんがつれていつてくれたのよ。」

「お化け屋敷でない。」

「ほ、ほ、ほ、そんなものではないわ。」

お友だちとこんな話をしていると、一人のみすぼらしいおばあさんが、鳥居のところに立ち止まつて、神社に向かつて拜んでいました。片手に長いつえを持っていました。

「あ、按摩さんだわ。」と、もも子さんは、びっくりしました。

「お嬢さん、もう何時ごろですか。」と、盲目のおばあさんは、遊んでいる女の子たちに

たずねました。

「そう、何時なんじごろかしらん、もう三時じ過ぎたのでない。」

「ちようど、三時じごろよ。」

「ありがとうございます。」と、おばあさんは、いき過ぎようとなりました。急に、もも子こさんはお母かあさんのおっしやつたことを思い出して、

「おばあさん、うちのお母かあさんをもんであげてちようだい。」

「はい、はい、ありがとうございます。」

もも子こさんは、哀あわれなおばあさんを自分じぶんの家いえへつれていきました。そして、あとの話はなしは、そのとき、お母かあさんと、もも子こさんが、この按摩あんまさんからきいたものです。

「おばあさん、いくつぐらいから、お目めが見みえなくなつたのですか。」と、お母かあさんが、おたずねなされたのです。すると、按摩あんまさんは、お母かあさんの体からだをもみながら、

「ちようど、このお嬢じようさんぐらいの時じぶん分ぶんです。やはり秋あきの日ひのことでした……。

外そとで、お友ともだちと遊あそんでいました。男おとこの子こがてんでに竹たけの棒ぼうを持もっているのが、林はやしのよ  
うに、原はらつばの空そらに突つつ立たっていました。頭あたまの上うへの夕ゆう雲ぐもが、絵えの具ぐで描かいたようにみごと  
でした。私わたしは、それまであんな美しい夕ゆう空ぞらを見みたことがありません。子供こどもたちは、遊あそ

びに夢中になつて、家へ帰るのを忘れていました。私は、母親が、町の方へ歩いていく後ろ姿を見たので、みんなから別れて飛んでいきました。母親のたもにつかまつて、橋を渡り、坂道を上がつて、お湯屋へまいりました。いつもいく、昔ふうの暗い湯屋でした。近所に旅館があるので、いろいろの人がこの湯へ入りにきました。

このとき、借りた手ぬぐいがいけなかつたのか、帰ると目が痛み出しました。そして、とうとう盲目になつてしまいました。不思議なことは、いまでもあの最後の日に見た、美しい夕焼け雲の姿が、ありありと目に残っています。」

「まあ怖ろしい。手ぬぐいに毒がついていたのですね。」と、お母さんは、ため息をなさいました。

もも子さんは、またうらさびしい秋の日に、おばあさんからきいたこの話が、いつまでも忘れられないだろうと思ひました。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「亀の子と人形」フタバ書院

1941（昭和16）年4月

※表題は底本では、「夕雲《ゆうぐも》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年9月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 夕雲

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>